

『経営に役立つヒント』

令和四年五月一日

第二百二十八号

「人生に意気に感ず。功名誰が復た論ぜん」

唐の初代皇帝（高祖）李淵に仕えた魏徴が、自分に対する高祖の信頼に応えて、身を賭して尽くした時に吐露した言葉だそうです。

仕事も、人生も、本来このような関係であるはずですが。

そこには利害得失、有利不利等の打算や計算を一切超越した、魂の共鳴・心の底からの感激があります。

何か感激に死のうとする純粋な、気高い心意気を、我々はすっかり忘れていきます。薄汚い打算や、延命にのみ汲々としている自分を発見して密かに冷や汗が出る思いがします。

安岡正篤先生が「学徒が、学問の為に死すのは本望ではないか」と、語っておられますが、我々社長は『経営者が、経営の為に死ぬのは本望ではないか』と読み替えればいいのです。

経営に命を懸ける！経営という大義に生きる！これこそ今、取り戻すべき経営者の神髄です。 マネジメントだ、コンプライアンスだ、マーケティングだという薄っぺらな小手先のテクニクでは感激も感動ありません。魂が入らないのですから当然です。

社長は、このような些末なことに、いちいち振り回されて疲れ切るのではなく、日頃は“昼行燈”と言われていても、いざという時に、俄然その存在感を示す者であれば良いのです。

経営の原理原則を身に付け、歴史上の人物や古典に学び、この混沌とした時期を正々堂々と乗り越えて参りましょう。

社長、「人生、意気に感ず！」感激・感動ある仕事をして参りましょう。
そして、社員の皆さんにも、そのことを熱く、熱く伝えて参りましょう。

今月のポイント

魂が震えるような、

深い感動の人生にするのが、

社長の仕事だ。

